平成 24(2012)年度　大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業　報告書

2012年度

伊達市霊山町泉原地区集落調査

２０１３年３月

桜の聖母短期大学
がんばっぺサークル

【目次】

Ⅰ　はじめに
　１．サークル概要
　２．調査地域概要
　　（１）位置
　　（２）世帯
　　（３）歴史
　３．基本データ
　　（１）調査実施者
　　（２）活動スケジュール

Ⅱ　活動内容
　１．参加したイベント内容
　　（１）ノルディックウォーキング
　　（２）泉原納涼盆踊り大会＆大同窓会
　　（３）体操指導
　　（４）収穫祭＆ノルディックウォーキング
　　（５）十三講
　２．民家訪問調査
　　（１）スケジュール
　　（２）聞き取り調査内容
　　（３）調査結果
　　（４）現地中間報告
　　（５）活動報告会:：域づくりオープンカフェ～集落エンジ 1001～

Ⅲ　今後に向けて（提案）

Ⅳ　おわりに

謝辞

Ⅰ　はじめに

1.　サークル概要

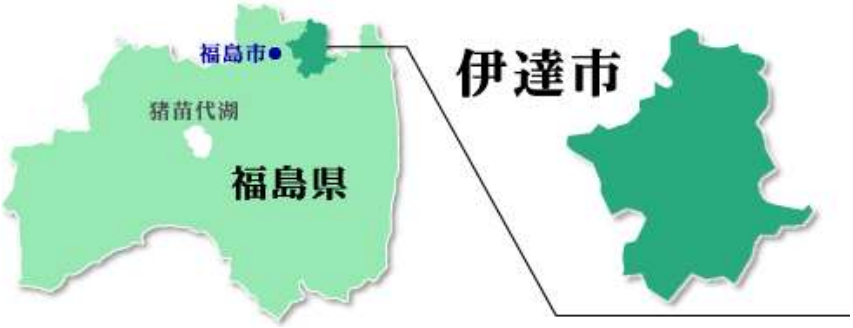
私たち「がんばっぺサークル」は東日本大震災を契機に誕生したサークルで、1年生 9名、2年生9名で構成されている。県内の大学の学生や専門学校の学生が、被災者支援などのボランティア活動を展開するために「ふくしま復興支援学生ネットワーク」という連携組織を立ち上げた。桜の聖母短大もこのネットワークに参加し、ボランティア活動を継続的に行うための団体「SSJC マネジメントネットワーク」を昨年度卒業された先輩を中心に結成した。その復興支援活動は「～繋がろう～桜色 smile プロジェクト」と名づけられ、復興支援ボランティアをマネジメントする形でがんばっぺ同好会として引き継いだ。平成 24年度からはサークルとなり、「がんばっぺサークル・福島復興支援マネジメントチーム」として活動中である。

震災以降復興活動をしてきたが、このプロジェクトに参加する機会が与えられた。私たちは復興支援に貢献できることは何かと考えた時、地域を活性化するということが大切であると考え、このプロジェクト参加はサークルの新たな挑戦として受け止め、活動を進めてきた。また、復興支援と地域活性化を関連させることは学生において困難な課題であるが、教員及び地域の方々の助言・協力等を頂きながら学生中心に活動を展開し、学生のアイディアを生かしながら地域の活性化のお手伝いをしたいと考えた。

2.　調査地域概要

(1)　位置

泉原地区は福島県伊達市のほぼ中央に位置し、市の中心部である保原の東に位置する。西に広瀬川、そして片貝山、北東に地区のシンボル鹿頭山、東を阿武隈の山々に囲まれた福島盆地と阿武隈山系の境にあたる。地区中心部は海抜70～90mのところに位置し、南東方向から北東方向に緩やかな平坦地で耕地に適している。



(2)　世帯

泉原地区の人口は 548 人、世帯数は 162(平成 23 年 3 月)統計であり、20 年前と比べて 170 人ほど、10 年前と比べて 100 人ほど減少している。

西暦	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2007	2009	2011
世帯数	164	162	161	159	158	159	159	161	162
人口	790	756	725	703	658	584	564	556	548

少子高齢化も著しく、高齢化率は 37.1%(平成 23 年 3 月統計)と、霊山町に属する全 9 地区のうち最も高い数値を示している。また、地区唯一の学校である「伊達市立泉原小学校」は、平成 23 年 3 月をもって閉校となり、明治 6 年開校以来、127 年の歴史に幕を閉じた。

地区名	泉原	掛田	山野川	中川	大石	山戸田	石田	下小国	上小国
高齢化率	37.1	28.7	31.1	33.3	34.8	29.3	33.7	29.5	33.3

(3)　歴史

泉原地区に人々が住むようになったのは、旧石器時代といわれている。南北朝時代には、南朝の北畠顕家が後醍醐天皇の皇子義良親王を奉じ、霊山を中心に陸奥の国府を多賀城から移し、一時的ではあったがこの地域に王城を築いた。 また、同じ時期に日蓮宗泉原山蓮昌寺が建立され、江戸時代には日蓮宗では日本で唯一の餅柱を奉納する十三講会式が行われるようになり、祭りを賑やかにするため若者で祭り講が組織され、その後、蓮昌寺に隣接する番神宮を信仰する番神講社（いわゆる青年団）となり、祭りなど地域の融和と発展に尽力し、戦後は盆踊り、十三講祭礼を行う祭り青年団として、十三講会式とともに現在も続いている。

3.　基本データ

(1)　調査実施者

サークル名	がんばっぺサークル　福島復興支援マネージメントチーム
サークル代表者	
サークルメンバー	
指導教員名	
調査対象集落名	福島県伊達市霊山町泉原地区

(2)　活動スケジュール

（1）

6 月 30 日(土)	午前：地区代表の方との打ち合わせ
7 月 15 日(日)	「ちびっこ広場」開所式 泉原史跡巡りノルディックウォーキング大会
8 月 13 日(月)	午後：泉原小学校同窓会・盆踊り大会
8 月 27 日(月)	午前：ヒアリング訪問 午後：ヒアリング訪問、中高生との交流会
8 月 28 日(火)	午前：集落歩き、ヒアリング訪問
9 月 4 日(火)	午後：泉原女性部の会　がんばっぺ体操
10 月 27 日(土)	午後：地区発表会
11 月 4 日(日)	大収穫祭・ノルディックウォーキング大会
11 月 16 日(金)	十三講会式準備
11 月 17 日(土)	午後：十三講会式
12 月 21 日(金)	午後：福島県知事表敬訪問
12 月 22 日(土)	活動報告会:：域づくりオープンカフェ　～集落エンジン 1001～
3 月 16 日(土)	地区の方々に挨拶・次年度の打ち合わせ

Ⅱ　活動内容

1.　参加したイベント内容

（1）ノルディックウォーキング

イベントに参加し、焼きそばやポップコーン、とん汁作りの手伝いをした。6 月 30 日に泉原自治会役員の方々とは顔合わせをしたが、泉原地区住民の方々とは初めての交流の時だった。集落の方々が私たちを受け入れてくれるか多少不安もあったが、みなさん気さくで優しい方々だった。集落調査に取り掛かるための第一歩になったと感じる。また、霊山太鼓の打つ姿を見て力強い演奏に感動した。

（2）泉原小学校同窓会・盆踊り大会

＊「ひきなもち」の「ひきないり」作り
＊お昼用のおにぎり作り
＊模擬店のポップ作り
＊模擬店の手伝い
　（輪投げ・くじ・水風船など）
＊餅つき（昔ながらの杵と臼を用いて）
＊大同窓会での「ひきなもち」の配膳
＊がんばっぺ体操
＊盆踊りへの参加

この日は朝から一日、地区の方々との交流を深めた。様々な体験をさせていただいたが、ひきないりを餅でからめた「ひきな餅」が印象に残った。ひきないりは普段から食べていたがそれを餅にからめて食べたのは初めてだったのでとても新鮮だった。甘酸っぱい味付けで餅との相性も良かった。また、餅は杵と臼でついたお餅なので食べた時の粘りが強く、甘みがあり、おいしかった。現在は、餅は市販のものを買ったり、機械で作ったりすることがほとんどだが、地域の人たちが集まり協力しながら行えることは団結力が強いからだと感じた。しかし、年代層を見てみると高年齢の方が多かったのでもっ

と１０代から３０代の人たちに参加があっても良いのではないかと思った。盆踊り大会では始まる前に、私たちが大震災以降に作った「がんばっぺ体操」も披露することができた。

（３）泉原女性部の会との交流（体操指導）

- がんばっぺ体操
- 球遊び
- ラーメン体操
- やきとりじいさん体操

「体操指導」という名目で様々な体操を一緒に行ったが、女性部の方たちは積極的に参加してくださった。また、経験豊かな方が多く、「お手玉はこう作るんだよ」とアドバイスをいただいたり、お手玉を３つも投げられる方もいたりした。人生の先輩方に教えていただくことばかりだった。今後もこのような交流を重ねて、様々なことを教えていただくことができたら良いと思った。

（４）大収穫祭＆ノルディックウォーキング

ノルディックウォーキングは講師の指導の下、ポールを使い、泉原地区内を歩行運動した。１キロコースと２キロコースがあっが、私たちは地区の住民の方と一緒に１キロコースを歩き、汗を流した。11 月だったので山が色づき始め、恒例の十三講の祭りに向けての準備も進められているように見受けられた。

大収穫祭では、泉原地区の住民が作ってくださった豚汁や手作りの餅が振る舞われた。餅をつくときの独特の賑わいの様子は例年変わりなく、住民の笑顔から地区で行われる餅つきに対する住民のこだわりが伺えた。

（５）十三講会式

十三講は伊達市無形民俗文化財に指定されている。この行事は日蓮の命日に行われる法要で、無病息災を願う赤・緑・白の餅と菊などで、幾何学模様の美しい高さ３メートルほどの餅柱を奉納する。この行事には男性のみしか参加しないが、今回は私たちも参加が許され、餅柱の飾りつけなどの手伝いをさせていただいた。蓮昌寺の幾何学模様に美しい２本の餅柱をもっと地元以外の幅広い年齢層の方々に見てほしいと思った。

柱に餅を付けている様子

餅柱完成！！

2.　民家訪問調査

（1）スケジュール

下記の日程で 1 泊 2 日の訪問調査を行った。調査 1 日目は 4 つのグループに分かれ、各グループが 4 箇所の民家を訪問した。2 日目は 3 グループは 1 箇所の民家、1 グループは女性部の方から伝統食などのお話を聞いた。

8 月 27 日		8 月 28 日	
12:04	阿武隈急行　福島駅発	5:30	散歩
12:22	阿武隈急行　保原駅着	7:00	朝食
13:00	民家訪問　調査開始	8:30	サークル内全体ミーティング
	１Ｇ	9:00	民家訪問
	２Ｇ	12:00	昼食
	３Ｇ	13:12	阿武隈急行　保原駅発
	４Ｇ		
終了後	入浴　つきだて花工房		
帰宅後	食事		
19:00	中高生との交流会		
21:00	中高生の太鼓披露		
23:00	就寝		

(2)　聞き取り調査内容

聞き取り調査では、生活、自然や生活環境、放射能問題、産業、地区の活性化などについて 16 の質問項目に答えていただいた。

(3)　調査結果

・泉原地区は好きか

泉原を好きだと答えた方は２１人中１７人であった。また、好きではないと答えた方はいなかった。どちらでもないと答えた方は４人であった。図１にあるように、８割の方が好きだということが分かった。

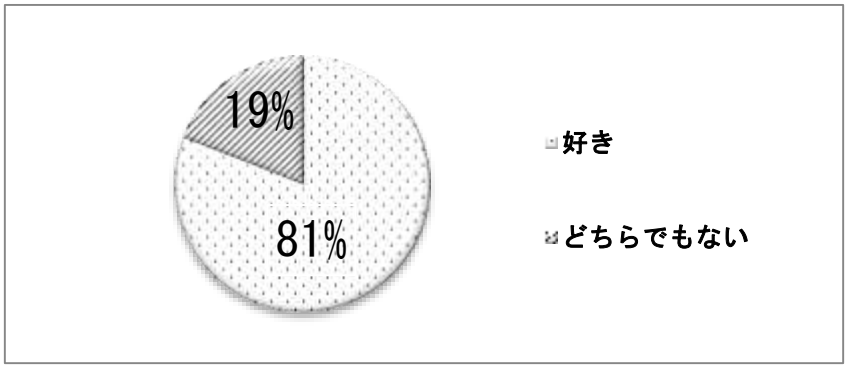


図１

・どんなところが良いと思うか・良いと思わないか

（良い面）

便利じゃないがいい塩梅。人がいい。人情味がある。水が少ないので山崩れしないので災害が少ない。自然豊かでのんびりと過ごせる。蓮昌寺を主体としてまとまりがあるところ。団結力がある。絆が強い。

（良いと思わない面）

これから過疎化が進んで空き家が増えるのが不安、水が豊富にないので水田を作るのが難しい。雨が降ると水が濁る。

・昔から食べられている食べ物

多くの方が、餅をいろいろな味で食べていると答えていた。あずき餅、くるみ餅、ひきな餅、草餅、納豆餅、お汁餅などがあげられた。その中でもひきな炒りで絡めたひきな餅をよく食べていると答えていた方が多かった。昔からお餅を法事で食べている。また、泉原地区の自然で育てられた野菜で作った漬物をよく食べている。

・買い物はどうしているか

買い物は週一回出かけて、大量に購入してくる。行先は霊山、保原、梁川である。

・生活に不便を感じていることはあるか

電車などの交通機関が近くになく不便を感じることがあるが、自動車があるので不便を感じない、しかし、将来高齢になり車の運転ができなくってしまった時が心配だ。地元に買い物するところがない。道が狭く対向車が通りづらい。

・泉原地区にあったらよいと思うものはなにか

学校、施設、働く場所、老人福祉施設、外で遊ぶ公園、多くの人が集まれる飲み屋、自動車が乗れない人のために買い物する場所、若者が来ること。

・若者に泉原地区に残ってほしいか

若者に残って欲しいと答えた方は２１人中１２人であった。残って欲しくないと答えた方は４人。どちらともいえないと答えた方は５人であった。**図２**でもあるように約６割の方が残って欲しいと思っているのに対して約２割の方は残って欲しくないとあり、理由として「子どもたちが通える学校がない」、「働ける場所がない」、「不便」といったような内容があげられた。

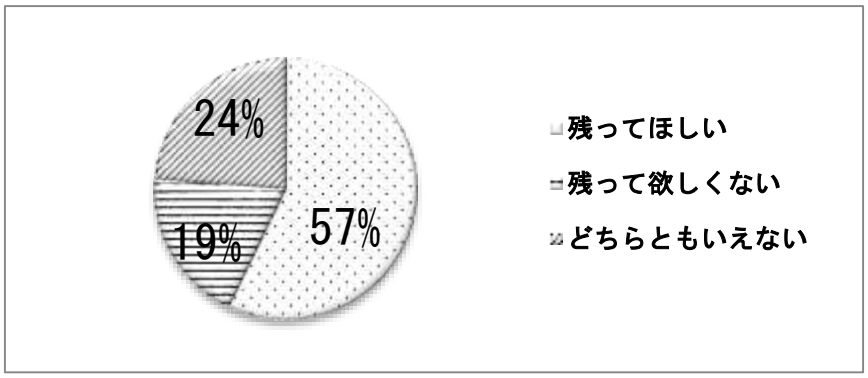


図２

・泉原地区の祭りやイベントに関心があるか

泉原地区で行われるイベントに関心があると答えた方は２１人中２０人で、ほとんどの人が関心を持っていることが分かった。（図３）関心がないと答えた方の理由として、「忙しく、自分の若いときにたくさん参加したから」という回答だった。

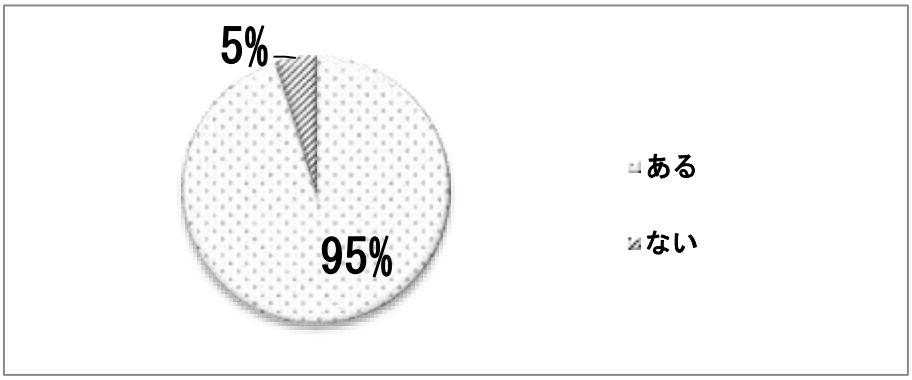


図３

・関心があるイベント

十三講会式、ノルディックウォーキング大会、同窓会、カラオケ大会などがあげられた。十三講祭は他の地区にはない行事であり、バンド披露や子どもたちの太鼓の発表の場にもなっているので関心があると回答した方もいた。

・中高学生との交流結果

参加したほとんどの中・高生は自然がきれいで、地域全体が顔見知りで、仲が良いので泉原が好きだと言っていた。その一方で、生活に不便を感じているかという質問に対して、最寄りの駅が遠い上に電車の本数が少ないため遊びに行くことが困難であると言っていた。また、泉原を出て他の地区や県外に行きたいかと尋ねたところ、出たいと思わないと言っていたのが印象的であった。

※なお、調査結果は泉原全体の結果ではなく、聞き取り調査を行った世帯の結果である。

１日目　聞き取り調査の様子

太鼓体験

泉原のお母さん達が作ってくれた朝ご飯

２日目　聞き取り調査の様子

（４）現地中間報告

○日時：平成２４年１０月２７日１０月　　１４：３０～１５：３０

○場所：泉原地区

○開催目的：今までのイベントを通して本サークルが感じたことを泉原地区の住民との意見交換

中間報告会では、今までに参加してきたイベント・宿泊調査の結果についてまとめた内容をパワーポイントを用いて発表した。指摘を受けた内容として、具体的な提案がない、スライドと言葉がかみ合っていない、グラフの表示について何人中何人が答えているかはっきりと提示するとこと、聞き取り調査の結果が必ずしも泉原全体の意見ではないこと、また自治会が掲げている活性化計画をよく理解しその計画に沿った提案をしてほしいとの声があげられた。中間報告では、本サークルの活動報告になってしまった。泉原地区の住民の方の前で中間発表を行い指摘をもらうことによって、本サークルが何かをして地区内を活性させるのではなく、地区住民同士ができ、地域の特色を活かした提案を提示することが地域活性に繋がると考えた。改善後の提案は、ｐ．１５以降に記載。

（５）活動報告会:：地域づくりオープンカフェ　～　集落エンジ 1001　～

○日時：平成２４年１２月２２日（土）　１３：３０～１５：３０

○場所：ホテルグリーンパレス　２階「瑞光」

○参加大学：宮城教育大学（小金澤研究室　仙台いぐね研究会）、法政大学（岡崎ゼミナール）、日本大学（工学部情報研究会）、福島大学（岩崎ゼミ）、会津大学（「ふくしま」を発見、世界に発信し隊）、東北大学（地域密着　Lab）、宇都宮大学（守友ゼミナール）、桜の聖母短期大学（がんばっぺサークル）

○活動報告（ポスターセッション）

桜の聖母短大からは指導教員も含め、６人が出席した。最初に支援地域である泉原の現状として、①高齢化率が霊山の全９地区の中で最も数値が高いこと、②大震災と同じ年に歴史ある小学校が閉校したことなどを報告した。様々なイベントに参加した中で豊かな里山景色を生かしたノルディックウォーキング大会と無形民俗文化財に指定され、蓮正寺に伝わる餅柱がとても魅力的に感じ、後継者不足により、消滅させたくないと強く感じる。行事ＰＲと泉原の位置情報伝達の強化を考え、行事ＰＲは、インターネットだけでなく、パンフレットなどを作り、教育機関に配布したり公共施設にポスターをはったりする。教育機関に配布する利点は子供から大人まで情報がいきわたるということだ。位置情報は、最寄り駅からの地図をパンフレットに記載したり、ここが泉原なんだと誰もがわかるような看板などの目印をたてたりしたらどうかと考える。さらに、今後学生も絡め、多数の笑顔を届けることで、泉原の住民の原動力となり、よき相談相手になればいいと考える。

○発表後

発表後、多数の方から意見がよせられた。その意見の多くが、餅柱についてだった。

「すべて、餅で作られているのか。「この餅柱を建てるのにどのくらいの準備期間を要するのか。」という質問があげられた。この餅柱の無病息災を願う赤、白、緑はとても一目みただけでも迫力があり、かつ斬新で、細やかな作業により作られているだけあって、その思いが感じられる傑作だ。どの方が写真を通してみても、素晴らしさに圧倒してしまうような感じがした。他にも土手かぼちゃとは何か。という意見もだされ、他にはない魅力を聴衆者が感じ取っていったようにも見えた。

〇意見交換会

意見交換会では、集落住民が主役となって意見交換をした。多くの集落の声を聞くと共通した悩みを持っているように感じ取った。また、以下のような内容が泉原の自治会からだされ、私たちとしてもどう思われているかの不安もあったため、力になった。

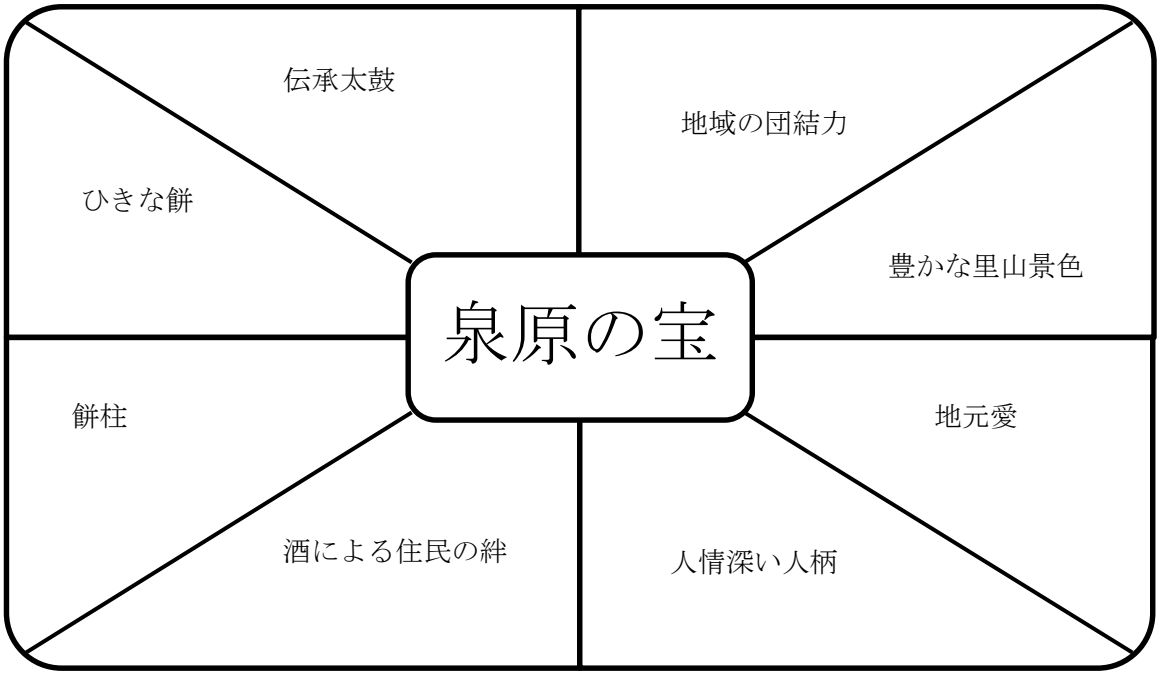
①大学生が来て変わった、得られたと思うこと	・地区民の方々が開催に協力的になった。
②大学生と知恵を出し合ったところは何ですか？	・カリキュラム、事業の流れ
③集落として、大学生が来ることで新たに取り組み始めたこと	・がんばっぺ体操 ・コミュニケーション

.

Ⅲ　今後に向けて（提案）

イベントや住民訪問調査を通して、泉原地区の“宝”や“魅力”をたくさん発見してきた。それは古くから地域に伝えられてきた祭りや伝承行事である伊達市指定無形民俗文化財に指定されている十三講祭、泉原地区に伝わる伝承太鼓、豊かな里山景観、ツルムラサキや柿、きゅうりなどの豊富な種類の農作物、昔から食べられているひきな餅、地域住民の団結力である。昔から築きあげてきた地域資源である伝統文化・食文化を新たな視点で次世代に伝えていくことが集落活性につながってくるのではないかと考える。また、昔からのものだけではなく、新たに始まったイベントであるノルディックウォーキング大会の参加者を増やし、泉原地区の魅力を最大限にＰＲするために活かしていくべきだと考える。

●私たちが感じた泉原の宝



●泉原区民会が提唱する泉原地区の地域資源

- 蓮正寺に伝わる十三講会式（伊達市指定無形民俗文化財）
- 地区のシンボル・鹿頭山から眺めた里山の景観
- 泉原地区に伝わる伝承太鼓
- 旧泉原小学校校舎（市内唯一であった木造校舎）
- 地区内の各集落で伝承・保存されてきた堂宇、祠、群

提案

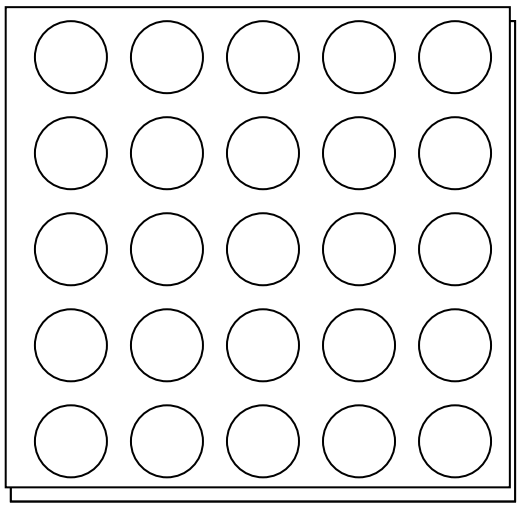
様々なイベントに参加し、宿泊調査をし、以下のことに泉原地区の宝を生かしながら、力を入れることが活性に繋がることと私たちは考える。

（1）十三講会式の餅柱

十三講会式の餅柱の模様をもっと日常的に取り入れるという提案である。餅柱の模様はとても迫力があり、無病息災を願う赤、緑、白の組み合わせは、時間を忘れてしまうほど美しい。小さいころからこの模様に触れ、この模様を身近に感じることは大切に思われる。大人だけでなく、子どもたちも餅柱に興味関心を持つことが伝統行事を維持・発展させることにつながるのではないかと考える。具体的な例をいくつかあげてみる。

①粘土を利用した餅柱づくり

★子どもに協力してもらい、柱に描かれているマークを作る。



Ⅰ　粘土に色を付け一定の大きさにお餅の形を作る。

Ⅱ　一つひとつに楊枝などを挿す。

Ⅲ　ハッポースチロールやダンボール等に上のようなものに 5x5 の印を付ける。

Ⅳ　それにあわせて好きなように粘土を差す。

※個人での作成もいいが、クラスで一個、班で一個など協力して一つを作ることもよい。

★子どもたちに作ってもらったものをお祭りの一角に飾る。

- 子どもたちの作品を蓮昌寺に飾ることで、その作品を親が見に来る。
- お祭りを次の世代に伝承することができる。
- 子どもたちも楽しく取組める。
- お祭りに参加する年代になったとき、自然と参加できるようになる。

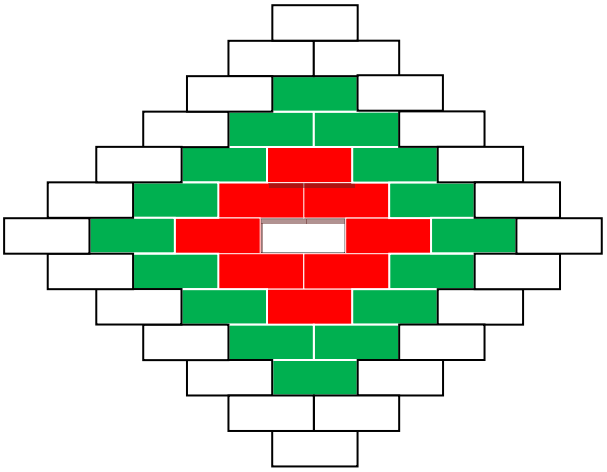
②塗り絵

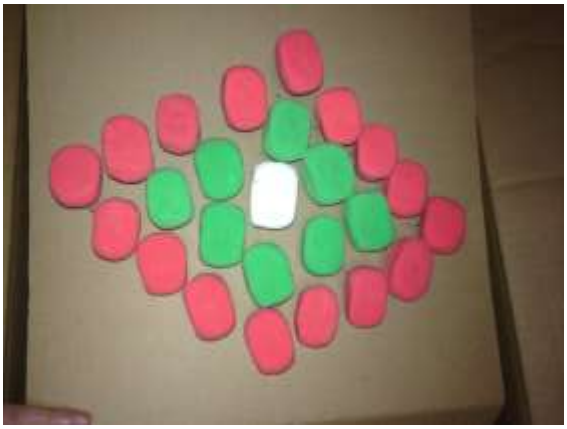
★子どもに協力してもらい、塗り絵を作る。

Ⅰ　あらかじめ餅柱のデザインを書いた紙を用意しておく。

Ⅱ　子どもたちに一人一枚配り好きなように色を塗ってもらう。

Ⅲ　それを集めてお祭りのときに飾る。





★子どもたちに　　作ってもらったものをお祭りの一角に飾る。

・　子どもたちの作品を蓮昌寺に飾ることで、その作品を親が見に来る。

・　お祭りを次の世代に伝承することができる。

・　お祭りに参加する年代になったとき、自然と参加できるようになる

・　幅広い年齢の子どもたちが参加できる。

（２）大収穫祭＆ノルディックウォーキング

泉原の宝の一つである豊かな里山景観を生かすノルディックウォーキングに力をいれる。泉原には「ヤッホ～」と叫びたくなる里山の景色、長いビニールハウス菊の花、ごろんと大きく転がりそうで、足を止めてしまいたくなる土手かぼちゃ等の様々な宝物が発見できる。このような泉原の宝を楽しめるノルディックウォーキングのようなイベントは地区の活性化のために重要である。ルディックウォーキングは誰にでもできる簡単なフィットネス・エキササイズである。普通に歩くよりもストックを使うので、普通の運動よりも４０～５０％効果的であり、ゆっくりしたペースでも確実にフィットネス効果を上げることができる。一定のペースを保ち、運動中に無理なく会話ができ、参加者同士が交流しながら、健康維持ができる一石二鳥のスポーツである。

ノルディックウォーキングの具体的効果

- 心拍数を脂肪燃焼レベルまで引き上げ、１時間に約４００～４１０カロリー燃焼させる。（普通のウォーキングでは２７０～２８０カロリー）
- 上半身を使うことで特に上腕筋を引き締め、たるみを解消する。
- 肩と胸の筋肉を伸ばすことで女性はバストアップ効果もある。
- 首・肩のまわりの緊張と痛みを取り除き筋肉をリラックスさせる。
- 膝や関節への負担をかけない。特に体重超過気味の人の負担を和らげる。
- 最小の整形外科的衝撃で心臓血管を鍛える。

平成 25 年度からは桜の聖母短期大学の多くの学生に声をかけ、参加を促したい。若者が大勢参加することによって、笑顔と活力を届けられたらよいと考えている。

（３）泉原の農産物を使って、商品開発！

泉原の農産物を使って商品開発を検討することが第三の提案である。泉原は兼業農家も多いが専業農家もある。宿泊調査の中で聞いたことは、風評被害により以前のように大量に農作物を育てることが困難になったということである。また、後継者不足により、自分の家で食べる程度に作るだけになっている。しかし、泉原には女性部という団体が存在しているので、商品開発も可能ではないだろうか。

例えば、泉原地区の農作物で桜の聖母の学生と泉原地区民の方々で商品を考える。あるいは、泉原の住民から商品開発案を募集し、試作し、決めていく。それが商品になれば、復興イベントやお祭りで売り出すこともできる。泉原特産の商品を通して、交流の輪が広がり、口コミなどで外部に発信していけたらよい。

「野菜クッキー」「漬物」（漬物の場合、霊山漬けとコラボしてはどうか。）「ジャム」などが考えられる。商品名に「泉原」の名前を入れれば、地名が知られる。泉原の農作物

で消費者の胃袋をつかみ、安全安心へのPRにもつながる。消費者との交流が広まり、さらに収益金が出るかもしれない。

（４）勤労者交流センターや旧泉原小学校での展示会や講習会の開催

勤労者交流センターや旧泉原小学校で講習会を開催する。泉原地区民にはたくさん趣味を持っている方がおり、その趣味はプロ級の技術である。宿泊調査での自宅訪問を通して学生たちは、その趣味で取得した賞状やトロフィーを目にした。あるいは、賞はもらっていないがとても魅力的な趣味を持っている方もおり、技術のすごさや細やかさに圧倒された。「あれだけの技術を持っているのにもったいないな～」という声が学生たちからあがった。住民の持っている宝を勤労者交流センターや旧泉原小学校を開催場所にして、展示会を開催することを提案したい。展示会や講習会を通して若者は年配の方の持っている技術に触れることができる。このような場は若者との交流の場ともなる。年配の方にとっても自分の自慢の作品や技を披露する場ができ、心の活性化の場ともなりうる。

（５）泉原地区の看板や張り紙

泉原地区の位置が誰でも分かるように看板を立てたり、張り紙などを掲示する。泉原地区と聞いても伊達市のどこに位置するのかわかる人は少ない。私たちも調査場所が決まったとき、学生の多くが福島出身だったが泉原地区の場所を知っている人はいなかった。近くの川俣町に住む学生でさえわからなかった。泉原に行くには、福島駅から阿武隈急行線に乗り、泉原の最寄りの保原駅で降りる。そこからまた車で２０分ほどかかる。調査のために何度も通ったが、看板なども小さく、わかりずらいことを感じた。お祭りが開催されても張り紙がないため、行き方が明確でないことが難である。

泉原への行き方や興味を引き付けるような看板や張り紙を最寄駅や、泉原の入口に置いてはどうだろうか。お祭りやイベントなどに参加する際、看板や張り紙があると行く方法がわかり、気楽に行くことができる。

■１回目のチラシ：「これは何や？」という反応

初めてチラシを見た人は、なんのチラシか確認して瞬時に自分にとって必要かどうか判断し、今必要としないものは不要と判断する。

■２回目のチラシ：「何について言うてるんやろう」という反応

人が同じチラシを見ると「これは何だ？」という反応は薄くなり、「何について言っているのか？」という反応に変化する。

■３回目のチラシ：「なんやったっけ？」という思いだす反応

３回目になると、「ああ、知ってる」という反応に変わり、４回目のチラシ以降は３回目の反応を繰り返すことになる。

このように何年かチラシなどを作成し、配りつづければ、必ず効果が期待されると考える。

● 今後にむけて

（１）お別れ会＆事業計画（2013 年 03 月 16 日）

泉原に到着次第～15 時半まで自治会にてお別れ会

15 時半～16 時 20 分まで地域振興委員会との来年度に向けた合同打ち合わせ

（２）今後の意向

泉原地区での活動は今後も継続したいと考えている。ノルディックウォーキングや盆踊り大会、大収穫祭や十三講会式などの地区の行事に参加して、地域外への PR が重要だと感じた。また、若者たちが訪れることで、泉原地区が活性化することもわかった。

初年度はイベントや訪問調査などを通して泉原地区を知ることが中心であった。次年度は今年度の経験をもとに提案されたことを実施できればよいと考えている。古くから地域に伝えられてきた祭りや伝承行事、豊かな里山景観、人的資源や伝統技術等を活用・保全し、次世代へ伝えていくことも考慮していきたい。

Ⅳ　おわりに

泉原地区での集落調査を通して私たちができることは、集落の方々に笑顔をお届けすること、がんばっぺ体操などの運動を一緒に行うこと、専門的なものは何もなく、寄り添うことしかできないように感じた。しかし、交流や調査などで泉原地区独自のたくさんの魅力を発見できたことは得難い体験であった。

泉原地区の住民の方々は思いやりがあり、親切で私たちが行くたびに、「大変だったね」「お手伝いはいいから、食べて」「来てくれてありがとう」などの声かけや励まし、その上たくさんおいしい料理もごちそうになった。私たちは地区の活性化のために参加したのだが、逆に元気ややる気を頂き、本当に感謝している。また、訪問回数を重ねていくたびに住民の方たちとの距離が縮まり、親しくなっていくことも嬉しく感じた。この地区の魅力は何といっても住民の方々の人柄である。

がんばっぺサークルの２年生が卒業しても、継続して泉原地区と関わっていきたいと思っている。２年生卒業後サークルのメンバーが９人と少なくなってしまうが、サークル以外の学生にも声をかけていく予定である。学内の広報活動も充実させたい。また、この泉原での活動にサークルの新一年生も参加してもらい、私たちが示した活性のための具体的な提案を実施していってほしいと願っている。来年度もお世話になります!

平成 24(2012)年度
大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業　報告書

伊達市霊山町泉原地区集落調査

編者：桜の聖母短期大学　がんばっぺサークル

発行：2013 年 3 月